

英語教育時評

新指導要領について考えること

外国語教育メディア学会 名誉会長 浅野 博 (筑波大学 名誉教授)

(1) 新指導要領の問題点

小学校と中学校の新指導要領が3月末に本決まりとなった。外国語に関係のある重要なことは「小学校5,6年で週1時間英語活動を行わせること」と「中学校では校授業時間を週4とする」であろう。高等学校については、まもなく発表されるであろうが、英語の科目がどうなるかが大きな関心事であるようだ。

基本的には「ゆとり教育」の是非があるが、ここでは紙数の関係から、「中学校の週4」という時間数を考えてみたい。「週3」が実施されて、地方自治体の議会なども反対の声明を出して、平成元年版(1989)でどうにか「週4」になったと思ったら、平成10年版(1998)では、必修科目にしたために「週3」に戻ってしまった。こういう「朝令暮改」では教育の効果などあがるはずがない。

(2) 指導技術との関連

指導要領は昔から「特定の指導法」とは関係ないという姿勢を堅持してきた。大きな時代の流れと無関係ではないが、英語教員には常識になっているようなことでも、別の用語で表すから混乱を招いてきた。「言語活動とは何か」「概要と要点はどう違うか」「実践的コミュニケーション能力とは何か」といったことが話題にされた。こうした議論である程度結論が出たとしても、すぐに指導技術の改善に結びつくことは少なかったと思う。かつてLLの利用者には、まず「音声言語」の重視があった。たまたま「文型練習」が中心になったために、オーラル・アプローチの衰退とともに「LLは時代遅れ」という印象を与えてしまい、LL自体も衰退してしまった。今のIT時代では、コンピュータの普及は目覚ましいが、多機能であるだけに焦点がしぼりにくく、実践についてはいっそう慎重な対応が望まれる。

(3) 学校の多様化と学力

文科省は「学校の多様化」を大きな方針として進めている。これは政治の地方分権とは性質が違うので、この二者は区別すべきものと私は考えている。なぜならば、学校の多様化を進めると、指導要領は有名無実なものになるからである。「それが望ましい」という見解もあろうが、いわば、自治体が憲法を無視しても、「地方分権だからしかたがない」と言うのに似ていることになる。現に、大学進学を目指す「中高一貫校」などでは、検定教科書などは、1年以上も早く終えて、問題集などを中心にした受験指導をする。必修のはずの「世界史」を教えていなかったということが大きな問題になったのはまだ記憶に新しい。最近では、神奈川県が「日本史」を必修にすると決めたら、文科省は簡単にそれを認めた。もし、「世界史」を必修科目からはずしたら、それも認めるのであろうか。そうなったら、指導要領の意味はなくなるのではないか。

また、新指導要領では、発音でも語順でも「日本語との相違に留意して指導する」ように注意している。これでは、「訳読式」に偏する恐れが多分にある。私は「すべて英語で授業ができる日本人英語教師が優秀だ」とは思わないが、訳読一辺倒でも、生徒の英語力はつかないと思う。指導要領だけではなく、教育の本質的な問題を常に意識していく必要がある。

LET 関東支部第 119 回研究大会を終えて

湯舟 英一（東洋大学）

今回は 8 年ぶりのティーチン開催となった。私自身、初めての参加であり、企画と当日の進行はティーチンを知り尽くした黄金井先生と滝本先生に全面的にご協力頂いた。内容は「徹底討論、あなたは今の CALL に満足ですか？」と題し、参加者がそれぞれの立場で CALL に対する日頃の思いを語った。

会場となった江陽グランドホテル真珠の間には、地元東北地区の会員や賛助会員を含め、様々な世代の CALL 実践者 30 名が 4 つのテーブルに分かれ、まずは食事に専念した。

会場も和んだ頃、司会の黄金井先生から問題提起があり、これに応答する形で、国吉先生、大八木先生、見上先生といった第 1 テーブルの先生方から次々と口火が切られた。先生方は独自の鳥瞰的、歴史的視点から CALL の功罪に触れ、これからの CALL を占いつつ期待を語られた。竹蓋先生はリスニング指導を柱とした CALL の有用性と基礎研究の重要性を熱く語られた。下山先生は、個別学習中の生徒一人一人との人間的ふれ合いを通して、学習の動機付けを育めるところに CALL 授業の醍醐味があると指摘された。予定の 3 時間はあっという間に過ぎ、心惜しさが残る会であったが、参加者全員の CALL に対する愛情と厳しさに触れ、実り多い一晩であった。もちろん一次会だけで終わることはなかった。



さて、翌日の研究大会当日は台風の影響で、朝から激しい雨中での開催となった。午前中はワークショップが 2 つと、並行して賛助会員プレゼンが開催された。これは支部大会のプログラムとしては初めての試みであったが、最新のハードウェアと e-learning 教材の紹介もあり盛況であった。午後は 3 本の研究発表・実践報告があった。なかでも、国際医療福祉大学のグループによる発表は、社会で活躍する卒業生や地元的话题を取り入れて学生の興味を喚起しつつ、ニーズアナリシスを取り入れた、学部にて特化したピンポイント処方教育実践例として大変参考になった。これからは、語学教育も

医療と同様オーダーメイドが主流になるかもしれないと予感させるご発表であった。

大会の締め括りは、会場校である東北学院大の村野井仁先生による講演「第二言語習得の認知プロセスを促す英語指導」であった。村野井先生は、インプットからアウトプットに至る過程を「提示 理解 練習 産出」の流れと捉え、この認知プロセスが 4 技能統合型の Focus-on-form による指導法によって促進され、結果バランスのとれた知的な英語力の習得につながることをご自身の研究成果と授業実践を踏まえて説明された。まさに今回の大会テーマ「授業力の向上」を理論と実践から支える指導法の紹介であった。



最後に、今回の会場を快くご提供くださった東北学院大学、ならびに会場確保や大会運営に多大なご協力を頂いた東北学院大学の風斗博之先生およびアルバイトの学生さんに、この場をお借りして深く感謝の意を表したい。

「 試行錯誤の授業実践報告 」

太田 洋 （駒沢女子大学）

はじめに

大学で教え始めて3年が経ちました。「90分の英語の授業って、どう行ったらいいだろう?」「どうしたら少しでも英語により興味をもってもらい、力をつける手助けをできるだろう?」など思いながら、試行錯誤を続けている状況です。そんな3年間の実践の報告です。

授業の目的

まずは何とんでも「学生たちに英語の授業は楽しいと思ってもらうこと」です。これがなくては始まりません。そのためには「自分もできると思ってもらうこと」です。「私もできる。前より書けるようになってきた。読めるようになってきた。」と感じてもらうことにより、「楽しい。」と感じてもらえると思います。

次に「様々な英語の学習方法を示し、活動を通して体験してもらうことで、自立した学習者になってもらうこと」です。授業は1年間で終わりますが、そこで得た学習方法を少しでもその先役立ててもらいたいと思っています。

そして最終的には以上のことを通して、「英語の力をつける」ことに少しでも貢献できればと思っています。(そうは簡単にいかないことはわかっていますが、)

授業の構成・流れ

授業は90分をいくつかの活動に分けて実施しています。30分ぐらいを目安に1つの活動を行い、90分で3つの活動を行います。授業の流れは、読む・聞くことから始めて、次に話す・書く活動にもって行きます。「読んで理解して終わりではなく、読んだことを生かして何かをする」という流れを原則としています。たとえば、あるパッセージを読み、内容を理解した後に、読んだことをもとに自分のことを表現するという流れです。

また目的にも書いたように「伸びた」と思う場面を設定するようにします。例えば速読では毎回読む速度を記録して、前回と比べてどうかということを振り返ってもらうようにしています。

活動例

活動例として Catch a Wave を使った授業を紹介します。浜島書店で発行されている Catch a Wave はその時々様々なニュースをやさしい英語で書いた英字新聞教材で、学生に好評な教材です。それを使い次のように使っています。

まず各自が読みたい記事を1本選び、一定の時間(5~7分)で読みます。難しい語句には巻末に注がついているので、それを参照しながら読みます。読んだ Task は5W1Hをメモすることです。(この形式は同僚の根本先生から学びました。)

制限時間の後は、内容をどのくらい理解したかを、教室の前に置いてある日本語訳を見て確認します。その後記事をもう一度読み、理解していなかったところにアンダーラインを引きます。

次に二人一組のペアになり、お互いに読んだ記事を話します。(英語でできればいいのですが、なかなかそうもいかず、できるところだけでも英語でやろうと言っています。)最後に読んでみての内容と感想を書きます。

おわりに

読むことからスタートして、読んだことを生かして活動をするという趣旨で授業を行っていますが、迷いながら試行錯誤を続けている状態です。大学での4年目の英語の授業、少しでも進化すればいいなあと思っているところです。

ディクテーションのバラエティと活動上の注意点

山本 昭夫 (学習院 高等科)

ディクテーションは、過去においては「単なるつづりや発音のテスト」だったが、現在では世界中で幅広く利用されている聞き取りの統合的テスト(Buck, 2001)である。授業でも多くの教員が利用している活動である。Davis and Rinvoluceri (1988)によると、ディクテーションを授業で利用する 10 の理由がある。おおまかにまとめると、生徒が活動的になり、一方でクラスを落ち着かせることもでき、口頭意思伝達活動につながり、大きなクラスサイズでも実行可能で、英語話者ではない英語教員にとっても安心して行うことができ、英語学習に有益で、興味ある読み物に触れるよい機会を与えるという。

ディクテーションは、聴いたものを書き取らせるだけのシンプルな活動である。単純に授業で扱った読み物を穴埋めにして書き取らせるというポスト活動や、会話練習をする前に台本を書き取らせるというプリ活動などでも効果はあるが、味付けによってさらに面白いものになる。

バラエティについては、世界中の教員が創意工夫を凝らしている。方法で工夫している例としては、Rost (2001)が、Dictogloss、Fast-speed dictation、Pause and paraphrase、Listening cloze、Error identification、Jigsaw dictation などを紹介している。山本(2007)は、5W1H という観点でディクテーションのバラエティについて紹介している。

ディクテーション活動の注意点の一つには、扱う英語の文が学習者に適した難易度であるかを考えてみたい。学習者にディクテーションをさせるときに、どのような文だとどんな影響を与えるかについてマイクロ調査を行ってみた(山本、2007)。変数は、文の長さ、文中の語の難易、文構造の難易、書き取る前のポーズのありなしである。対象は、大学進学希望の英語が苦手という高校 1 年生である。高校総合英語の参考書付属の例文と CD を用いた。手順は、16 の文を CD から聴いて書き取ってもらうが、半分をポーズ有り無しに分けた。書き取り後、解答の英文を見せて、難しいと思う語や構文に下線を引いてもらった。

結果は、文の長さはあまり明確な難易度の違いがなく、未知語や定着していない構文は書き取りにくく、ポーズがあるととたんに書けなくなる人もいた。考察としては、文の長さについては、今回使用した文では差が明確にでなかったというだけで、同じ難易度の語や構文での比較だと書き取りの難易が変わる可能性があるだろう。ディクテーションの文では極力定着度の高い語や構文を含んだ文を利用した方がいい。ポーズは、英語が得意でない学習者にはつらい作業となるが、英語力をつける上で役立つかもしれない。

参考文献

Buck, Gary. (2001) *Assessing Listening*. Cambridge University Press.

Davis, Paul. and Rinvoluceri, Mario. (1988) *Dictation: New Methods, New Possibilities*. Cambridge University Press.

Rost, Michael. (2001) *Teaching and Researching Listening*. Longman Pub Group.

山本昭夫(2007)「ディクテーション活動のバラエティと有効性」第33回全国英語教育学会大分研究大会課題研究フォーラム「リスニング・スキルを高めるトレーニング」大分大学

「えいごリアン」を使ってみて

佐藤 令子（田園調布雙葉小学校）

2010年から高学年で週当たり35コマの「外国語活動」が公立小学校で必修となる。英語指導の経験が少ない学級担任にとって不安が大きいかと想像する。その先生方にとって強力な助っ人になるのが、2000～2001年度制作NHK学校放送番組「えいごリアン」である。（再放送を重ねたが、2007年度で放送終了・VHS/DVDで市販されている。NHKのホームページ「えいごリアン4」は継続）この番組は、年齢に関係なく楽しめる、実に不思議な魔力を持った番組である。私は3年生に見せているが、1度見せたら次に教室に入ると、必ず「今日もビデオ見る？」と聞かれるぐらい人気が高い。目を輝かせて最後まで食い入るようにテレビ画面を見ている子どもたちの姿に驚きすら覚える。公立小学校での飛び込み授業の折に見せる時も、全く同じ反応を得られる。

番組は、英語に挑戦するユージ、彼の手助けをする仲良しマイケルとジャニカの3人を中心に進行する。二人のわかりやすい英語の話し方は、教師にとって teacher talk の良い見本となる。2つのスキット、アニメのマヨケチャ、ユージが変身したミニ・ユージが外国人と片言の英語を使って色々な異文化体験をするコーナー、他教科の内容も盛り込み、取材フィルムの迫力ある画面が続く映像コーナー、歌などで構成されている。どの場面でも、1つの決まった英語表現（番組タイトルの表現）がいろいろな状況で適切に繰り返し使われているので、英語の体験がない子どもでも大体の意味を類推することができる。

その子どもたちが4年生になったときのこと、授業で How many ~ do you have? を使ってゲームをしたのだが、授業の直後、一人の子どもが私のところに来て、英語らしい音で "How many takoyaki do you have?"（マイケルの使った英語）と私に質問したのである。彼女は3年生のときに見たスキットの印象が強く、そのときに使われていたあの表現を覚えてしまったのだろう。1年を経た英語の授業のときに同じ表現 How many ~ do you have? が繰り返し使われるのを聞いて、その意味を理解し、そらんじていた音の流れを思い出して私に聞かせてくれたのである。「えいごリアン」の威力を感じた瞬間であった。

もう一例ご紹介したい。それは、2000年度の最後の番組でミニ・ユージがインターナショナル・スクールの子供たちと仲良く「だるまさんがころんだ」のゲームをしているシーンを見ていたときのことだった。どこからとなく自然発生的に、子どもたちの拍手が聞こえてきた。ミニ・ユージの堂々たる英語の使い手としての姿に子どもたちは自分の姿を重ねていたのかもしれない。こんなところに今言われる「コミュニケーション能力の素地」が育っていると思う。「えいごリアン」はホームページも充実している。子どものためのページでは番組に添ったゲームが楽しめる。先生のためのページでは、公立小学校で実践した「えいごリアン」を使った授業を動画でみることもできる。勿論、授業案とともに番組に出てきた表現を使ったアクティビティーも紹介されている。「えいごリアン」を見ている15分は担任も子どもと一緒に楽しめばよいと思う。全部で40しかないのが残念でたまらない。NHKが学習指導要領の改訂を機に、新しいシリーズを作ってほしいと願わずにいられない。

コンピュータ研究研修部会

神田 明延（首都大学東京）

コンピュータ研究研修部会では、コンピュータを使って語学授業で活用できる各種技術やサービスの講習や研究会などを催してきましたが、今年度は以下のような講習会を開きました。「Moodle による授業運用入門～LMS,CMS に何ができるのか?～」(2008年2月23日 於首都大学東京)をテーマに、まず神田より「実践報告：Xoops と Moodle を比較して」CMS とは何か、なぜ Xoops と Moodle を使うのかという基本的な入門の話しと、授業で使ってみた結果などを報告しました。

次に宮添輝美氏(国際基督教大学)より、「講習：Moodle で授業を運用するには」Moodle の基本的な使い方を講習されました。内容はインストールを除き、プロフィール編集から、各種リソースのリンクの張り方、フォーラムの作り方、クイズや HotPotatoes との連携などでした。また授業での運用での成果や効果なども話されました。

また参加者へのアンケートも Moodle で行い、概ね好評を得ました。参加者は予約された人が全員来られて13名で、盛況でした。また練習用の Moodle のアカウントはその後3月一杯開放しましたので、Moodle の良さを知っていただけるとありがたいです。

また講習に先立ち副責でもある岡崎弘信氏(創価大学)より LET 講習会プロジェクトの研究報告もあり、様々な講習の要望やあり方について報告があり、若干の意見交換もありました。今後の部会の講習内容の参考になりました。

さて、最後に当部会は次年度より名称を「e-Learning 研究研修部会」に変更し、責任者も替わり装いも新たに再出発します。コンピュータを使うことが当たり前になったこのウェブの時代に、より内容に相応しい名称のもと、活発に活動を継続しますのでご参加よろしくお願ひします。

早期外国語教育研究研修部会

久埜 百合（中部学院大学）

2006年度に手をつけた電子黒板を活用する授業改善研究を具体的に進めてきた。電子黒板(使用機器：スマートボード)付属のソフトウェア Notebook に、従来から使用してきた Action Series(ぼーぐなん出版・久埜百合制作)を取り込み、電子黒板のなかった時期の授業と比較しながら、この新しい機器を活用することでどのような授業改善が可能であるかを探った。研究開始の当初から、この機器を利用することによって、公立小学校へ導入される外国語活動の授業を改善充実させる可能性を研究の目的としてきたが、実際に授業実践を重ねてきて、さまざまな発見があり、興味深い結果を得ている。

部員(岡澤・久埜)と岡澤の勤務校の同僚で話し合いを重ね、興味のある教材開発経験のある方、公立の先生・指導主事などのご意見もいただき、2008年1月26日には部会として公開研究会を開くことが出来た。参加者を30名としたところ、お断りした方もあったが、会の後で情報を得られた方も含めて、再度の公開研究会の要望が来ている。

公立小・中学校には、各校に電子黒板が配置されることが予定されており、中学の先生からも問い合わせが来ている。

来年度も引き続き、電子黒板活用の授業研究を続けていく予定である。

学習環境研究研修部会

滝本 晴男 (大妻女子大学)
石川 洋一 (日米会話学院)

株式会社内田洋行 潮見オフィスカスタマー・フィーリング・センター(CBC)見学会

日時：2008年1月19日(土)15時～17時
参加者：11名

場所：(株)内田洋行潮見オフィス内
共催：LET 関東支部 早期外国語教育研究研修部会

「未来の学校」や「未来の図書館」を彷彿とさせる空間や、「タンジブル・インターフェイス」の概念に基づく、PCのキーボードやマウスを使わずに印象的なプレゼンテーションができるシステム「プロジェクションテーブル」などが設置されています。「タンジブル」とは「触れる」「実体のある」の意味ですが、コンピュータを意識せず、手に触れるものをインターフェイスとして利用するコミュニケーション手段を活用した、斬新でモダンな空間の中で暫しの間童心に返り、さまざまなメディアに実際に手で触れ、近未来を予感させるワクワク感を楽しみました。ICタグを利用した設備が中心でしたが、デジタル技術を隠れた部分に利用し、いかに驚きを演出するかに基本理念がおかれていたようでした。また、アナログ的なデザイン/動きをデジタルで演出するという試みもなされていました。映像を等身大/実物大で体験できる「1/1スタジオ」では、120cmのドラえもんとも会うことができました。

そして最後には、空間デザインだけでも視覚の驚きを演出できるのだ、ということ思い知らされ、とても楽しい見学会となりました。機会があればお尋ねになることを、強くお勧めいたします。

教材教授法研究研修部会

久保田 章 (筑波大学)

今年度の活動のテーマは、「教材の作成や開発について原点に立ち返って考える」で、特に、日々の授業と教材開発の様々な課題との関わりについて(再)検討することになりました。そのため、多くの定評ある教科書や教材の開発を手がけてこられたお二人の先生にお願いして研修会を開催しました。上半期の2007年7月には、太田洋先生(駒沢女子大学)に「教室で行っていたことを教材作りに生かす」という題目でお話いただきました。中学校と大学での指導の中で得られた学習者のパフォーマンスに関する情報を教材開発にどのように活かすことができるかについて、特に文法や語彙の観点からご説明いただきました。下半期は、12月に大八木廣人先生(前LET 会長、前拓殖大学教授)に、「英語教育の質を高める教材編成上の視点 - 私の映像教材作成基準」と題して講演していただきました。言語運用力の養成との関わりを中心に、教材編成の理念や背景、シラバス、オーセンティシティ、タスクなど、理論的、実践的諸問題について多角的に解説していただきました。共に盛況で、活発な議論が交わされ、授業と教材開発の双方向の関わり方について理解を深めることができました。

当部会では、研究活動の一環として、将来メディアを利用した教材の作成を共同で行う構想があり、部会員は、各自いろいろな教材を実際に使用しながら、新しい教材を開発するための具体的な問題を把握して検討してきました。中には、ポルトガル語のドリルと小学校での教室英語のテキストを出版する予定の会員もいました。

